

nikkor club

283
2025 WINTER

「冬」を愉しむ4つの冬譚
特集





ニッコールクラブの街歩き撮影会「ニッコール撮影散歩」で富山県射水市へ。目的地までの短い旅は路面電車。短い間隔の駅ごとに乗客の乗り降り。運転手さんが常連さんを見送ると、またガタンガタンと走り出す。そのリズムのよさなのか眠くなる。エアポケットのような時間。連写することさえすっかり忘れていた。 Z50・NIKKOR Z DX 16-50mm f/3.5-6.3 VR・f/11・1/160秒・ISO400





会場では、オリジナルグッズなどの物販ブースもご用意。



専用ケースに入った、NIKKOR Z 58mm f/0.95 S Noctの実物をご紹介。



PHOTO HUB by nikkor club Thanks day 2025 レンズ開発者トークを開催！



——まず、お二人が光学設計者を目指した経緯を教えてください。
大竹 カメラに興味を持ったのは大学生時代です。若いころからアウトドアが好きで、山登りで出会った美しい景色に感動し、それを記録したいと思ったのがきっかけでした。当時はアウトドアに向いた軽くて丈夫なカメラを使っていたので、そうした原点から、レンズの軽さは大事だと現在も考えています。そして撮影を続けるうちに、レンズそのものに面白さを感じるようになりました。描写の違いや、肉眼ではわ

学生時代の経験が光学設計の原点

「PHOTO HUB by nikkor club Thanks day 2025」を開催いたしました。多彩なプログラムを開催する中で、今回はニッコールレンズ光学設計者のトークショーの模様をご紹介します！

——お二人とも、普段はどんな写真を

からない感覚的な仕上がりの違いなどに興味を惹かれたのです。
原田 カメラとの出会いは、高校で写真部に入った時です。この時期に近視になり、それで考えたのが「見え方が変わると、相手の印象や関係性も変わる」ということです。レンズでいえば、解像度などとは別のもので、印象をとらえる性能とでもいえるでしょうか。逆にいえば、レンズで被写体の見え方が変われば、そこから受ける印象も変わるので……と感じたのが、光学設計者としての原点だったと思います。

その後大学でも写真部に所属し、暗室に籠もり、鍋を持ち込んでみんなで食べたりしながら楽しく過ごしていました。そして多くの写真を撮る中で、古いレンズであっても、最終的なプリントで階調がきれいに出ると気づいたのです。これも、今まで続くレンズ設計の大切な観点ですね。

登壇者



大竹史哲

NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II、NIKKOR Z 400mm f/4.5 VR Sなどの設計を担当。



原田壮基

AF-S NIKKOR 24-70 mm f/2.8E ED VR、NIKKOR Z 50mm f/1.2 Sなどの設計を担当。

撮っていますか？

大竹 現在はアウトドアの機会が減り、特に旅行や家族の写真が中心です。自分でも写真を撮る中で、人物の肌の質感などを、可能な限り写真で表現できるようになりたいと、現在も考えています。

原田 接写が好きで、標準域・大口径のマイクロレンズがあれば個人的には

間での葛藤はあ
――これまで失敗談や、理想と実現の
提案し、お客様にとつての最良の形を探す、という流れです。なので大竹さん
んの言うとおり、掘り始めるときりがなく、時間を忘れてしまいますね。

大竹 工場の人たちは、決して冷たい人ではなく、製品に価値があると伝えれば受け止めてくれます。一緒にニットコールレンズの理想を叶えてくれる心強い味方です。

使っています。1950年代から、大口径レンズの世界規模の競争が始まります。しかし、この時代のレンズは収差がありますが、悪いものではなく、心地よい描写につながっています。当時の設計者が全体のバランスをしつかり考えていましたのがわかるレンズです。

現行のレンズだと、私が設計したNIKKOR Z 50mm f/1.2ですね。また、

それでいいと思つています。私も家族の写真は多いですが、それは私だけではなく、写した子どもたちにとつても価値があるものです。そして、さらに先の世代にも残つていくものだと考えて

社内で「丸となつて」「良いレンズ」の開発を目指す

——レンズ開発に取り組む中で、感じないと感じる」と、難しいことは何ですか？

大竹 あるスペックのレンズをつくる時、その実現方法は無数にあり、それをひたすら検討して掘り尽くすように

して い ま す。複 数 人 で 「こ ん な レ ン ズ
に し た い」 と い う企 画 を考 え たあと、そ
の 最 も 良 い 実 現 方 法 に つ い て 假 説 を立
て、アイ デ ア を掘 つ て いく……。これ
が 設 計 で 一 番 楽 し い 時 間 で す ね。

原田 設計というと、企画部門から降りてきたものをやつてていると思われるかもしれません。しかし実際の製品開

もつと練つてほしいと言わされました。その後も半年ほどかけて改善点を洗い出したのですが、製造現場には当時の上司から「これ以上ない設計」とすでに伝えていたので、ここから変更してよいかどうか……と悩みました。そこで上司に相談すると、「設計者のレベルが上ったからOK」といつてもらえ、製造



相棒になるレンズと一緒に撮影を楽しんでほしい

——プライベートでは、どんなレンズを愛用していますか？

て いる 方々 へ メッセージ を お願い し ま
す。

1965年発売のNikkor-
Auto 55mm F1.2は古レンズですが、とても好きですね。古いから悪い、ということではなく、繊細な解像感にふわっとしたフレアが効いて、それが日常を印象的に撮らせてくれます。昔の設計者が大事にしていたこととが伝わるレンズです。

大竹 レンズにはいろいろな種類がありますが、何を撮りたいか、いつ使いたいかという目線によつて、必要なものは変わります。だからこそ、「好きなレンズ」が一つあると、より写真が楽しくなるはずです。また、今まで使ってこなかつたレンズはどんなだらうと考へて、新しい製品を試してみると、きっと新しい発見や驚きがあると思ひます。

る子どもたちをとらえる際など、NIKKOR Z 24-70mm f/2.8は、番です。あとから写真を見返すと、なんわり良さが伝わるレンズだ

は本当にたくさんレンズが
ですが……1930年代以降
コーティングのレンズもよく

原田 弊社は人々に寄り添つて、何か新しいものをつくり続けたいと長年考え続けています。そんなレンズたちが皆さんの人生に寄り添つて、ともに経験を重ね、喜びや嬉しさ、新しい発見の一助になるのが最大の喜びです。そのため、皆さんの横にあるレンズが素敵な相棒になればと思います。

原田
弊社は人々に寄り添つて、何か
ます。

新しいものをつくり続けたいと長年考
え続けています。そんなレンズたちが、
皆さん的人生に寄り添って、ともに経
験を重ね、喜びや嬉しさ、新しい発見
の一助になるのが最大の喜びです。そ
のために、皆さんの横にあるレンズが
素敵な相棒になればと思います。

CONTENTS



表紙写真 Yuri

やわらかな冬の光が差し込む中、公園で出会った蠟梅の小さな花を撮影しました。お花を小さく入れることで、可憐さを表現しつつ、背景の光や蠟梅の他の花を玉ボケで残したこと、日常の中に宿る華やかさが伝わる1枚になるよう意識しました。
Z5II・NIKKOR Z 50mm f/1.8 S・f/1.8・1/2500秒・ISO125

特集

10 冬を愉しむ4つの冬譚

写真・解説 櫻子／中野耕志／成澤広幸／Yuri

ふゆものがたり

- 02 PHOTO HUB Thanks Day 2025 REPORT
- 04 キャッシュバック・キャンペーンのお知らせ

コンテスト

- 32 サロン・ド・ニッコール カラーの部
選評：小林紀晴（1～3席）／ハナブサ・リュウ（佳作）
- 44 サロン・ド・ニッコール モノクロームの部
選評：大西みづぐ
- 52 ネイチャー・フォトサロン
選評：三好和義
- 60 ステップアップ・フォトサロン
選評：秋山華子
- 65 ワンポイントアドバイス
- 66 総評／得点表
- 68 予選通過者一覧

作品

- 06 THE GALLERY企画展
「桜」深澤 武
- 08 THE GALLERYセレクション展
「新・植物百景」岡本洋子
- 表4 熊切大輔×
NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II

製品情報

- 28 PRODUCT REVIEW VOL.33
ZR 上田晃司
- 73 ニッコールクラブ会員限定
「NDオリジナル三脚NDTP2」
特別販売のご案内

連載

- 表2 Photography Portfolio Vol.7
大西みづぐ
- 20 インスピレーション 第七回
『日本画家 田中一村』 三好和義
- 22 多彩な現場でも
その実力を發揮するニッコールレンズの魅力に迫る
ポートレート×NIKKOR Z 135mm f/1.8 S Plena
写真・解説：河野英喜
- 24 THE AWARD WINNER
第73回 ニッコールフォトコンテスト グランプリ受賞作家
眞野瑞己 文：タカザワケンジ
- 26 エプソン 楽しくきれいにプリント講座 Vol.26
理想のプリントを実現するためには？ 森 誠
- 30 アベっちの使った！撮った！ vol.11
NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II 阿部秀之
- インフォメーション
- 09 写真展スケジュール
- 69 NCニュース
- 74 Let's Go Nikon College！
街明かりの情景 ～夜景撮影が好きになる～ 五木田友宏
- 75 会員写真展 PickUP！
「聖地・撮り旅」野寺一徳／「祈りの記憶」住吉聰
- 76 支部だより・支部展情報
- 77 イベントレポート・イベントニュース
- 表3 Nikon College 2026年1月・2月・3月講座
- 卷末 ニッコールクラブ登録情報変更依頼書
会員向け販売 FAX受付案内
会報284号フォトコンテスト応募規定



nikkor
club

写真：中野耕志

nikkor club

4つの冬譚

ふゆものがたり

冬を愉しむ

「冬の街」「野鳥」「星景」、そして「冬の日常」——

研ぎ澄まされた冬の光と影が織りなす、

特別なストーリーに迫ります。

感動の物語を見つけ、ドラマチックな一枚を完成させるための
視点の見つけ方や撮影技術をご紹介。

あなただけの「冬譚」をカメラに刻みましょう。

nikkor

冬の街

ふゆものがたり1

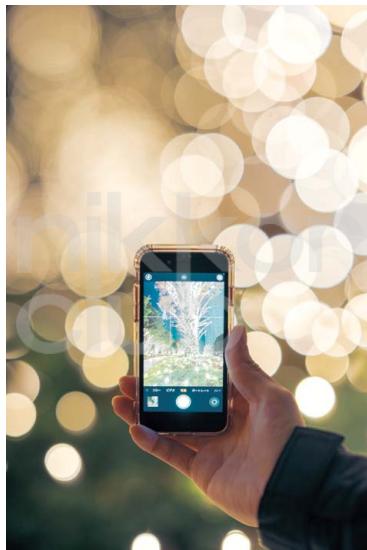
冬の光が紡ぐ物語
イルミネーションの中で“ぬくもり”を探して

写真・解説 櫻子



窓越しの温もり

窓越しに灯る光の電飾を、ガラスに反射する街灯の光とともに撮影。ブルーアワーの空を背景に、全体を青のトーンで統一することで冬の冷たい空気感を表現。反射した光をやわらかくぼかすことで、冷たさの中にも温もりを感じられる一枚に仕上げています。Zf·NIKKOR Z 40mm f/2·f/2·1/125秒·ISO200



手のひらの中の世界

手元のスマートフォンにピントを合わせ、背景のイルミネーションをたっぷりぼかして撮影。135mmの単焦点レンズを使用し、f2に絞ることで柔らかな玉ボケを演出。フレームの余白を広くとることで、画面の多くを玉ボケが占める幻想的な一枚に。Zf·NIKKOR Z 135mm f/1.8 S Plena·f/2·1/250秒·ISO800



冬の街で写真を撮る時は、光そのものを追いかける楽しさもありますが、あえてピントをぼかしたときにふわりと滲む玉ボkehや、ショーワインンドウに反射する光は、どこかドラマチックで特別です。まるで、光が別の姿を見せてくれるよう……。そんな気づきに出会えたとき、光と遊んでいるような感覚をおぼえます。

一年前の冬のこと。ふと窓の外を眺めていたとき、窓越しに見えた風景と室内の灯りがガラスに反射して重なり合い、偶然にも幻想的な光景を見ることができました。その瞬間がとても印象的で、いつかこの光の重なりを多重露出で再現してみたいと思いつ、自分なりの光のとらえ方を考えるきっかけとなりました。

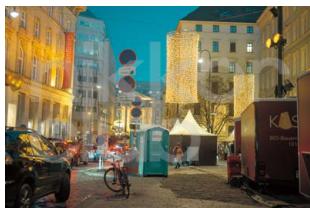
冬の街は、時間帯によって光の表情がガラリと変わります。特にすめしたいのは、日が沈んだあとに街



多重露出で 動きのある景色を

1枚目に余白のある暗めの写真を撮影し、多重露出機能を使ってその余白部分に玉ボケを重ねました。玉ボケを撮影する時は、レンズの半分を手で覆って撮影し、半円状のボケを作ることで、光の描写に流れと動きを演出しています。 Zf·NIKKOR Z 40mm f/2·f/2·1/250秒·ISO10000〈多重露出(加算平均)〉f/2·1/250秒·ISO5600

脇道の、静かな雰囲気



街全体がイルミネーションに包まれる、ウィーンの冬。メインストリートから少し離れた脇道で撮影しました。あえて賑わいから一歩外れた

人通りの少ない通りを選び、その場所に漂う静かな空気感を表現しました。

全体が少し青みを帯びた雰囲気に包まれる「ブルーアワー」。わずかな時間ですが、イルミネーションの灯る街並みが最も魅力的に映る瞬間であり、透明感のある写真を撮るには絶好のタイミングです。この美しい瞬間をとらえるには、日没の少し前を狙つて、変わりゆく空の色を観察してみましょう。撮影するときは、街灯や装飾など、ひとつの主人公を決めるのもおすすめです。光とどう融合するかを考えながら撮影することで、物語を感じる一枚に仕上がつていきます。
さまざまな光の情景が広がる冬の街。ぜひ、とつておきの瞬間を見つけてみてくださいね。

『日本画家

田中一村』

三好和義



一村がよくモチーフにして描いたのがビロウの木。南国の夕陽と大きな葉を組み合わせてみた。撮影したのは小笠原の父島。ここも南国らしい一村を思わせる風景。

目が眩むほどの色彩

常識さえ超越した

孤高の美に憧憬した

の古刹に通い、悠久の時間を幼いながら感じた。

その意味では今でも、こんな写真の先人たち作品が頭にある。

少し大人になって、気がついたの

は浮世絵の魅力。浮世絵のデフォル

メが、実に写真的だったのだ。以降は写真の構図の勉強に絵画を意識的に見るようになった。

大学を卒業して、本格的にプロ活動をするようになつた20代に知った

のが、田中一村。

彼の絵には衝撃を受けた、まさに

自分が求めて、表現したい楽園がそ

こにあった。

調べてみると、一村は画家として

は、決して恵まれた生涯を過ごしたわけではないようだつた。

まるでルソーのような南洋の絵。

この時代にこんな発想をする画家が

日本にいたこと自体が驚きだ。

日本画からは想像もできない豊か

な色彩の世界。カラフルといつてい

い世界が、そこに拡がつていて。

一村の絵には不幸な境遇の影など、

まったくない。屈託がないと言つて

もいいような、根本的な明るさ。

徳島という温暖な気候で育つたこ

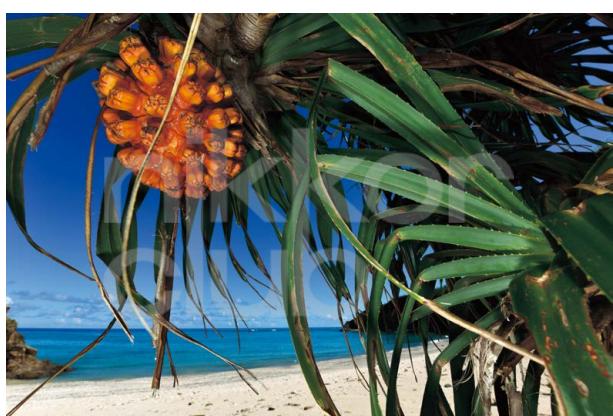
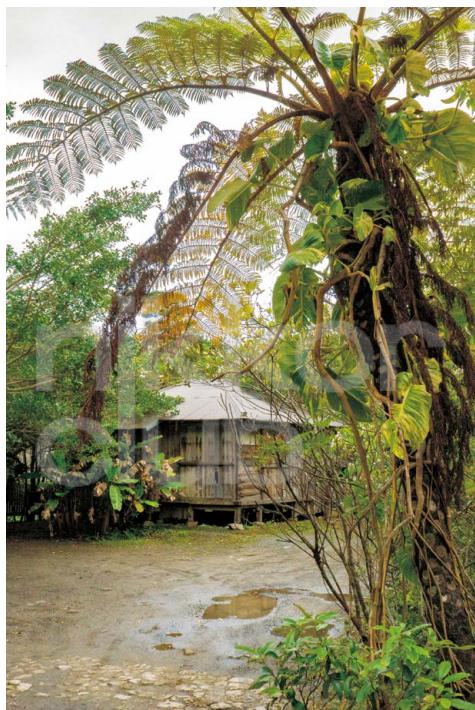
とも影響して、南国的な世界は僕に

とっては身近なものだつた。

思いの赴くままに写真を撮りたい

と中学時代に一人で渡つた沖縄、先

島。那覇ならともかく、当時、本土
素直に勉強して中学の時には奈良
真を見て、写真を知れ、ということ。
大学を卒業して、本格的にプロ活
動をするようになつた20代に知つた



一村といえば「アダムの実」を一番先にイメージする、撮影は沖縄の海岸。心の中では、古の奄美にタイムスリップしていた。

から先島へ渡る人などほとんどいなかつた時代。

その時に感じた南国の解放感が、村の絵にはあった。彼を知った当時は、海外を中心にリゾートなどで撮影をする日々。

あまり国内で撮影することが少な

くなっていた。でも、彼を知り、一度、日本の新しい魅力に気付かされたのだ。

それからは意識的に国内での撮影をするようになつた。一村が住んだ奄美はもちろん。屋久島、沖縄本島、先島から小笠原まで。

田村一村記念館を訪れた時には実際に感慨深いものがあった。恵まれなかつた画家人生だったのに、今はこれほどの立派な美術館がある。

本物の芸術なら時を超えるのだ。ならば、自分も心して写真に取り組もうと決心を新たにした。

来年は初めての写真展を開催して50年になる記念年。開催したのは、今は無い銀座ニコンサロン。

その時に決心した写真家になる夢は果たした。これからも、時折、一村の画集を眺めて、写真藝術を目指した初心を思い出していきたい。

(右上) 奄美大島で撮影したオオタニワタリの群生。森の中に生い茂っている。奄美大島最高峰から流れる湯湾川。(右下) 写っているのはタコの木。曲がりくねった独特の姿。この葉の先端には鋭いトゲがついている。(左上) 鮮やかな色彩で美しいルリカケス。奄美大島で撮影。(左下) 一村が晩年を過ごした終焉の家。素朴な家。この地に立ち、カメラを構えて、一村の生涯を感じ取った思いになった。

第73回ニッコールフォトコンテスト グランプリ受賞作家

眞野端己



「寒暁の舞」第73回ニッコールフォトコンテスト グランプリ受賞作品

——写真を始めたのは2024年3月頃だとか。つい最近ですね。きっかけは？

眞野 ふあらおさんという動物写真を撮られているYouTuberの方がいまして、その方の作品が本当に素晴らしいと、自分で撮つてみたいと思ったのがきっかけです。

——小さな鳥を探すのは大変だと思いますが、コツはありますか。

——素晴らしい作品ですね。いつ、どのような状況で撮影されたのでしょうか。

眞野 今年の2月に、岐阜の森林公園で撮影しました。すごく寒かったのを覚えています。この鳥はルリビタキという鳥なんですが、冬鳥の中でも珍しくて、見つけるのに苦労しました。なかなかいいポジションに来てく
れなくて、待つのも大変でした。

73回を迎えた伝統あるニッコールフォトコンテスト。応募作品の頂点に立つグランプリに選ばれたのが、U-18部門（単写真）の「寒暁の舞」だ。色鮮やかな鳥が羽根を広げた劇的な一瞬を逃さずには捉えたのは、高校生の眞野瑞己さん。受賞作はどのよううに撮影されたのか。

——鳥の探し方は写真を始めて
難しいので、鳴き声に耳を澄まして
います。あとは枝に小鳥が
いると笹が揺れたりするので、
そういう変化を手がかりに見つ
けています。



瑞己さん（手前）とお父様の智弘さん。「いつも一緒に撮影を楽しんでいます」とのこと。

眞野 貯めていたお年玉を切り
いでしょうか。
——鳥を撮るにはカメラと望遠
レンズが必要ですよね。機材を
揃えるのも大変だったのではな
なって覚えたことが多いですね。

眞野瑞己 2024年3月頃より撮影を本格的にスタート。入賞歴は今回が初めてで、初めてのコンテスト応募でグランプリを受賞する。使用機材はZ8とNIKKOR Z 400mm f/4.5 VR S。学校では写真部所属。



地元の公園で撮影した、飛び込み中のカワセミ



家で愛猫を撮るのも楽しみの一つ



岐阜・高山で観光時に撮影したシマリス

——これから写真を続けていく上で、いずれこうすることをしたいという夢はありますか。
眞野 僕は本当に鳥が好きなので、南米など海外の鮮やかな野鳥を写真に収めたいです。

——これから写真を続けていく上で、時間をかけて少しずつ色相や明暗のバランス、光の入れ方を意識しながら現像しています。
眞野 Adobe Lightroomというソフトを使って、時間かけて少しずつ色相や明暗のバランス、光の入れ方を意識しながら現像しています。

崩したり、父に長い時間をかけて相談しました。父には撮影の時にクルマを出してもらったり、いろいろと協力してもらつていて感謝しかないです。

——今回初めてコンテストに応募されたということですが、きっかけはあつたんですね。

眞野 自分の写真がどのくらいのレベルなのかがわからなかつたからです。

——ニコンというブランドへの憧れもあったのですね。

眞野 ありましたね。使っているカメラとレンズがニコンZ 8とZ 400mm f/4.5 VR Sなんです。ニコンのカメラはファインダーが綺麗で、撮影時のテンションを上げてくれます。テンションが高いと良いショットが撮れます。それにニコンでしか出せない色があつて愛用しています。

——今回の作品も色が印象的です。「自身でレタッチもされてるのですよね。

たので、有名な先生方に見てもらって、自分の実力を知るきっかけとなるといなと思いまし。ニコンさんがフォトコンテストをやっていると知ったのもきっかけの一つです。

INTERVIEW タカザワケンジ

写真評論家。1968年群馬県生まれ。金村修との共著『挑発する写真史』(平凡社)、『Study of PHOTO 名作が生まれるとき』(BNN新社)日本語版監修のほか、内倉真一郎写真集『忘却の海』(赤々舎)などに解説を寄稿。京都芸術大学ほかで非常勤講師を務める。IG Photo Galleryディレクター。

熊切大輔 × NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II



Z8・NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II・f/8・1/800秒・ISO400

フォトジェニックな瞬間。

それを捉えるための反応力。

NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S II の
機動力が後押しする。

子どもたちの天真爛漫な動き。

予測不能だから

面白い表情が生まれるのだ。

その一瞬の出来事に

素早く正確に

フォーカスしてくれる。